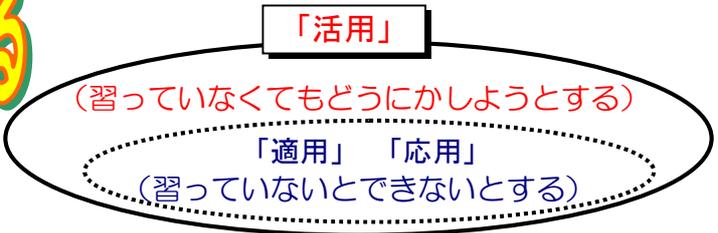


## 活用力をこうとらせる

私は、「活用」に関わる周辺の用語を右図のような構造でとらえています。



「適用」とは・・・

一皿にいちごが3個ずつのっています。お皿は4つです。いちごは全部で・・・

$$3 \times 4 = 12 \quad A. 12 \text{ 個}$$

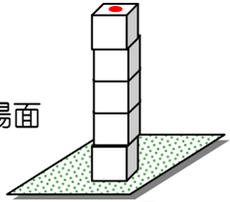
\* かけ算を学習している状態で、明らかにかけ算の適用場面と判断できる問題場面で、かけ算を用いるようなこと。

「応用」とは・・・

さいころを縦に積み上げたとき、見えない面の目の合計はいくつになるでしょう。

$$7 \times 5 - 1 \quad A. 34$$

\* 一見、かけ算とは関係のないような問題場面にかけ算を用いられるようになること。



このように、「適用」・「応用」は、使う内容(知識・理解)が明らかで、それを使うことが前提となっているような場面で用いるイメージです。

一方「活用」とは・・・

〇〇個のあめを17個ずつ配ります。何人に配れるでしょう。(整除できる場面)

はじめのあめの個数は100個かな?(C;いいえ違います)未習のわり算の問題場面と認識していても「 $17 \times 10$ 」とか「 $17 \times 100$ 」というかけ算を用いて、〇〇個を予想する。

このように「活用」は、未習の問題場面であろうと、その問題解決に向けて、既存の知識や技能を用いようとする事なのです。さらに、活用力育成の指導ポイントには、以下のことが考えられます。

- (1) 活用のレベルを明確にする(求めるのはレベルA)
  - C; 計算や作図といった技能の活用や数学用語のような知識の活用
  - B; 具体的な個別の問題を解決するためのストラテジーの活用
  - A; 筋道立てて考えることや帰納的・演繹的に考えるといった思考様式の活用
- (2) 活用のよさを感じさせる
  - 活用して解決した結果、それまで意識していなかった新たな概念や知識が自分にとって価値あるものと納得させる
  - 新たな算数を子どもたちで創り上げさせる
- (3) 活用は関連付けてみようとする見方から迫らせる
  - 既存の何が使えそうなのかを子どもに意識させていく(関連する既習の考え方は何?)
  - 教師は、帰納的・演繹的、どちらの問題解決を目指すのかを明確にする
  - 「・・・を使いなさい」や、前時の考え方復習から始める授業では、活用力は育たない

以上、「活用」は、教師が事前に育てたいものの見方や考え方を明確にし、そのことに絞って重点的に思考させるという手立てが不可欠と考えます。